

地域における青少年健全育成推進会議

令和4年12月19日（月）

オンライン開催

○地域活動推進担当課長 大変お待たせいたしました。ただ今から令和4年度地域における青少年健全育成推進会議を開会いたします。

本日はご多用のところ、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。

私は、本日の司会を務めます東京都生活文化スポーツ局都民安全推進部地域活動推進担当課長の宮坂と申します。よろしくお願いいたします。

本日の出席者についてですが、ただ今画面に表示しております会議参加者名簿をもちまして出席者の紹介とさせていただきますのでご了承ください。

それでは、開会に当たりまして、地域における青少年健全育成推進会議会長の東京都生活文化スポーツ局生活安全担当局長、小西康弘よりごあいさつをいたします。

○生活安全担当局長 本会議の会長を務めさせていただきます東京都生活文化スポーツ局生活安全担当局長の小西でございます。開会に当たりまして、私から一言ごあいさつを申し上げます。

委員の皆さまにおかれましては、平素からそれぞれのお立場で地域における青少年の健全育成にご尽力いただいておりますことに深く敬意を表しますとともに、心から感謝申し上げます。

東京都では、子供の規範意識やコミュニケーション力を育む取組に加えまして、地域の中で障害者、高齢者の方々などとの交流により、他者を思いやる、外国人の方との交流を通して、多文化への理解を深めるなど、青少年のダイバーシティの意識を育む取組を推進しているところでございます。

これは、青少年が地域の方々との触れ合いや様々な体験を通じて多様な価値観に触れ、社会性を身に付けることができるよう、社会全体で育てていかななくてはならない存在であるからであります。この取組を効果的に進めるためには、特に、各地域の最前線でご活躍されている青少年健全育成地区委員の方や、青少年関係団体の皆さま、区市町村や学校関係の皆さまのお力が重要であると考えております。私どもといたしましては、皆さま方と、より一層連携を深めつつ、青少年の健全育成に取り組んでまいりたいと考えておりますので、今後ともご協力のほど、よろしくお願いいたします。

本日の会議では、神奈川大学人間科学部人間科学科教授の齊藤ゆか先生をお招きし、「若者が地域参加したくなるボランティア：若者のココロの構造を知る」をテーマに基調講演をいただきます。

また、講演後は、委員の皆さまからも日頃のご活動を通じて感じていらっしゃることについ

て、忌憚のないご意見をいただき、今後の東京都の取組に生かしてまいりたいと考えております。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

○地域活動推進担当課長 それでは、本題に入る前に、本日の会議の公開について申し上げます。

都の附属機関等の調査・審議につきましては、原則として公開するということが附属機関等設置運営要綱に規定されておりますので、本日の会議は公開とさせていただきます。

また、議事録につきましても同様の扱いとなります。本会議終了後、委員の皆さまに改めてご確認いただいた後、公開する予定でございます。ご承知おき願います。

それでは、次第に則りまして議事を進めさせていただきます。

初めに、要綱第4の2に従いまして副会長を選出させていただきます。要綱では、互選により定めとなっております。事務局より、東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長、米今俊信を副会長に推薦させていただきたいと存じますが、皆さまいかがでしょうか。

ありがとうございます。それでは、米今委員、よろしく願いいたします。

続きまして、東京都の青少年健全育成事業についてご報告いたします。

東京都では、本会議を含め、子供たちの規範意識やコミュニケーション力を育む取組をはじめ、地域で高齢者や障害者などさまざまな人との交流により、他者を思いやる、外国人との交流を通して多文化への理解を深める等、ダイバーシティの意識を高める取組を進めています。

画面には、私ども生活文化スポーツ局地域活動推進担当の所管する事業等を図にお示しております。中央、区市町村と連携した地域の支援、左下、青少年健全育成地区委員会の活動への支援、右下、学校と連携し、学びの機会を提供する事業を実施しています。これらの事業は、区市町村の青少年行政主管課や地区委員会、学校と連携しながら展開しているところです。

まず、区市町村と連携した地域への支援についてご説明いたします。

青少年応援プロジェクトでは、「多文化理解」、「障害者や高齢者への理解」、「スポーツ・職業体験等」のテーマに適した講師を派遣することで講演会や交流体験を支援しています。画面は、今年度の実施例で、奥多摩町で多文化への理解をテーマに、子供や地域の大人向けに講演会と体験交流を行いました。

次に、地域で青少年の健全育成活動を行っている地区委員会への支援です。左側、地区委員会なんでもアドバイザー派遣は、地区委員会の皆さまが活動していく上での様々なお悩みを解決するために専門家を派遣し、アドバイスをを行っています。実施方法は、講義方式やワークショップ、グループ討議方式などもあり、コロナ禍でも支援できるようオンラインによる実施も

可能としております。画面は、今年度、足立区の地区委員会で実施した事例です。新たな企画づくりの考え方、進め方をテーマに講義と意見交換を実施し、地区委員会の活動に役立てていただきました。

続いて、右側、青少年健全育成地区委員会等推進モデル事例集は、地区委員会等が地域ぐるみで青少年を育成する取組を紹介し、今後の活動の参考としていただくものです。今年度も新しい日常を踏まえながら、地域で協力の輪を広げた取組を中心に、事例集の作成を進めております。

さらに、学校と連携し、学びの機会を提供する事業を紹介します。

左側、中学生の主張東京都大会では、身の回りのことや社会に向けての意見等を募集し、発表する場を提供し、中学生が日頃考えていることなどを都民の皆さまに知っていただく機会としております。昨年度も多くの応募があり、最優秀作品は全国大会へ推薦されました。今年度までの作品は、文集としてホームページに掲載しておりますのでぜひご覧ください。

右側、あいさつ音楽劇は、小学校を会場にして、プロの音楽家による音楽劇を通じて、児童と保護者、地域の方々が社会のルールや思いやり、あいさつの大切さを学ぶ機会を提供しています。

これら、ご説明した事業の詳細は、私どものホームページでご覧いただけます。

地域において、青少年の健全育成を行っていくためには、区市町村、地区委員会、学校や地域の方々との連携が不可欠です。東京都は、引き続き、皆さまと一緒に取組を進めてまいりますので、今後ともよろしく願いいたします。

以上で報告を終わります。

次に、区市町村の青少年健全育成活動について、江東区よりご報告いただきます。

○江東区青少年課地域連携係　こんにちは。江東区青少年課地域連携係の蛭川と申します。画面の共有をさせていただきます。

江東区では、令和4年において、青少年応援プロジェクト@地域の事業を江東ジュニアリーダーズクラブ及び江東区青少年対策地区委員会の計2回、研修で活用させていただきました。

江東ジュニアリーダーズクラブは、10月2日日曜日、多文化への理解をテーマに、タレントのオスマン・サンコン氏をお招きし、実施いたしました。こちらは、例年行っております江東区主催のジュニアリーダー上級研修会という地域行事等に参加する子供たちに指導できるジュニアリーダーを育成することを目的として実施している研修のパッケージのうちの一つに

組み込ませていただきました。

江東区青少年対策地区委員会では、10月5日水曜日にスポーツ・職業体験をテーマに、元バレーボール日本代表の大山加奈氏をお招きし、実施いたしました。こちらも例年行っている既存の江東区主催の委員研修会に組み込ませていただいたところでございます。

それでは、それぞれに実施した研修を報告させていただきます。

まず、江東ジュニアリーダーズクラブについてです。この研修では、多文化への理解をテーマに選択いたしました。選択した理由といたしましては、多文化への理解を子供たちが深めることで、文化が異なる方と関わる場合のコミュニケーションや、おもてなしの方法を考えるきっかけになればいいなと考えたことと、また、多様性の尊重、受容を学び、今後、ジュニアリーダーが地域ボランティアをする際において、中心的な役割を担う人材育成の一環にできればと考えたからです。

研修内容につきましては、事前の東京都様との打合せ段階で、ジュニアリーダーは年下の子供たちへリクリエーションをすることを得意としているので、リクリエーションや遊びを通じて楽しく多文化への理解を学べるような内容をお願いしてございました。全部で2部構成となっておりまして、第1部は、オスマン・サンコン氏の講演会、第2部では、軽く体を動かすようなアフリカの遊びを体験させていただくものとなりました。

こちらが研修会の様子でございます。左上の写真が第1部講演会の様子、右上の写真が第2部体験会の様子でございます。こちらの体験会では、サンコン氏が子供の頃、アフリカでやっていた遊びを紹介していただきました。物が無い中でも自然の中でできるような遊びをサンコン氏自らアイデアを出して考えたというゲームとなっております。内容としては、床にゲーム用のマス目をマスキングテープで作成し、片足ケンケンの状態で、そのケンケンの軸足を使い、6マス全てにボールを止めてゴールを目指すというものでした。とても難易度が高く、ゴール達成できる人はなかなか出ないという結果でした。

下の写真は、研修の最後に撮った集合写真でございます、

続いて、簡単にアンケートの結果報告をさせていただきます。

主な参加者の年齢につきましては、ジュニアリーダーになりたての中学生9名と、高校生4人、計13名でした。

第1部、講演会についての子供たちのアンケート結果です。記載のとおりでございますが、子供たちは、サンコン氏の幼少期やギニアの文化についてお話を聞き、今の日本で過ごしてい

る、自分たちの過ごしている環境との違いや、文化の違いを感じ取ったようでした。

第2部、体験会についての子供たちのアンケート結果です。記載のとおりとなっておりますが、物資に乏しい環境下であっても、自然の中でどのように楽しむのかというのは、自分の工夫次第だということを知ったようでした。

以上でジュニアリーダー研修会の報告を以上とさせていただきます。

次は、青少年対策地区委員会の担当者から報告させていただきます。

○江東区青少年課地域連携係 地区対委員学習会に利用した内容につきまして、江東区青少年課地域連携係の宿谷よりご報告いたします。

実施概略につきましては、こちらの表のとおりとなっております。今年度につきましては、講師の方、元バレーボール日本代表の大山加奈氏を、江東区から希望させていただいたところですが、講演がとても上手な方、また、青少年や子供の育成に関わりのある方として、参加者や江東区という地域の特性に合った講師の方を何人かこちらからリクエストさせていただいて、今回このような素晴らしい方を講師としてお招きできたところです。

内容といたしましては、先ほどの説明と同じような形で、講演会と体験会の2部構成で実施いたしました。

研修の様子は、こちらの写真のとおりとなっております。左上が講演会、右の写真が実際にバレーを通じた体験会、そして下の写真が質疑応答の場面の写真となっております。

アンケートにつきまして、初めにこちらが参加者の年齢層を表したグラフとなっております。幸いなことに、令和2年度、令和3年度もこちらの事業の方を活用させていただきましたので、そちらと比較してご参照いただきたいと思います。

なお、令和2年度は、障害者への理解をテーマに選択して、講師は車椅子バスケの日本代表ヘッドコーチの方、令和3年度は多文化への理解をテーマに選択し、柔道パキスタンの代表選手の方を講師として招きました。

続きまして、講演会の方のアンケート結果です。こちらは、過去2年度と比較したら、より良いような結果が出たということが今回の講演会となりました。

続きまして、第2部の交流体験会についてのアンケート結果がこちらです。こちらは非常に良かったという意見が大半を占める一方で、今回、バレーの体験会が非常に盛り上がったこともあって、アンケートの右のような、普段スポーツをしていない人も、ちょっと興奮してしまうというような場面があったことを懸念されるアンケート結果もございました。

こういったアンケート結果の方は、企画会社の方を通じてまとめていただけますので、またもし次年度活用できることがありましたら、こちらをまた改めて参考の上、体験会を盛り込んでいきたいと考えております。

こちらが地区委員会の報告となります。江東区からは以上となります。お願いします。

○地域活動推進担当課長 江東区の皆さま、ありがとうございました。

続きまして、足立区よりご報告いただきます。

○足立区地域調整課中央本町区民事務所係長 こんにちは、足立区役所中央本町区民事務所の橋本です。よろしく願いいたします。

私が担当する地区委員会では、令和3年度と令和4年度と2回この制度を活用させていただき、この制度を活用したこともあり、地域で一つ事業をつくることができました。

それが今年11月に開催したボッチャ大会です。その一連のご報告も兼ねて説明させていただければと思います。

令和3年度の話になるんですけども、多文化への理解ということで、にしゃんた氏に講演いただきまして、内容なんですけど、一番下の四角に囲んだところで、「違いは国レベルではなく、身近なところもあり、違いだらけの中で我々は生活している」、「違いとともに生きるには、共生だけでは不十分であり、共育、共楽、共学、共活、そして何より共に笑い合える環境、共笑（キョウショウ）が大切である、そうしたことを踏まえて多文化の方と接してほしい」という講演内容でございました。

真ん中の講演会後の理事会というところの四角で囲んでいるところを見ていただきたいんですけども、講演会后、色々話し合った結果、外国人に接するのってなかなか難しいよねっていう話が出まして、そもそも外国の方が町会自治会に加入していないであったりとか、アプローチの仕方が難しい、言葉の壁など、そういったことで、ターゲットを外国人に限定せずに、性別、年齢、国籍関係なく、つながりをつくる事業をやってみようかっていうところで、令和3年度の11月にボッチャ体験会プチ大会を開催いたしました。それが写真の右二つなんですけども、スポーツ推進委員さんが主になって説明していただき、あと、ボッチャを直接投げられない方にランプを使っての投球も子供たちに見ていただきました。

いよいよ令和4年度の応援プロジェクトなんですけど、昨年度にボッチャの体験会をやったので、ボッチャのルールであったりとか、成り立ちは分かってます。ただ、ボッチャに長年関わっている方から、魅力であったり、考え方、姿勢、ボッチャの可能性を学ぶことが必要だ

というふうに我々考えていまして、今回、お申込みさせていただいた時に、ボッチャの選手をぜひ派遣していただきたいということをお申し出した結果、秋元妙美さんに来ていただくことになりました。それが下、写真の2枚になるんですけれども、その時、1部が講演会で、2部がボッチャ体験会ということでした。ボッチャについては、初めて体験する方も多かったのですが、誰でもできるスポーツということで認識していただいたのかなというところと、アンケートでは、7割以上の方が非常に良かったという結果をいただいております。

その時に講演会で学んだことが、失敗できる環境が大切で、失敗しても責めない、あと、仲間と一緒に悩み考えて、一方的に可能性を否定せず決め付けない。あと、寄り添う気持ちを大切にすること、こういったボッチャの精神がインクルーシブへとつながり、お互い認め合える地域社会へつなげてほしいという講演内容でございました。

最後になるんですけれども、こうした令和3年度と令和4年度の青少年応援プロジェクトを活用させていただいたこともありまして、今年の11月に第1回のボッチャ大会というものを開催することができました。ボッチャ大会なんですけど、先ほどボッチャの精神ということをお伝えしたんですが、私、見る限り、自然に、あふれるように子供も大人もできてたんじゃないのかなっていうふうに思ってます。

写真の一番左が全チームの子供大人混合で15チームで競いました。真ん中の写真が、試合を重ねるごとに接戦ということで、ご覧のとおり、結構、かなり接戦な試合も非常に多かったです。

最後、優勝したチームの写真なんですけども、これ、女性のチームなんですけども、誰でも優勝するチャンスがあるということで大変盛り上がった次第でございます。

今後なんですけど、今回、町会自治体の方の参加が非常に多かったので、次回からは、町会自治会の加入に限らず、地域の団体にお声掛けして、ボッチャを通じて共に笑いながら地域の絆を強くしていく、そうした中で外国の方もぜひ参加していただくように努力していきたいなというふうに思っております。

私の説明は以上になります。

○地域活動推進担当課長 足立区様、ありがとうございました。

続きまして、講演に移ります。

「若者が地域参加したくなるボランティア：若者のココロの構造を知る」と題しまして、神奈川大学人間科学部人間科学科教授の齊藤ゆか先生からご講演をいただきます。

齊藤先生は、生涯教育学やボランティアを専門とし、潜在的ボランティアが一步踏み出し、能動的な活動に参加、参画していくためには、どんな条件設定や環境づくりが必要なのかといったことを研究課題とされています。特に、今回は、ボランティア活動を通じた若者の地域参加について、先生の研究や日頃の活動等も交えてお話しいただきます。

それでは、齊藤先生、よろしく願いいたします。

○齊藤教授 はい、よろしく願いします。神奈川大学の齊藤ゆかと申します。

はい、改めまして、皆さん、こんにちは。

わたくし、神奈川大学の人間科学部に勤めております。生涯教育学とかボランティアとか NPO などが専門になっております。普段は、社会教育や教職の学生などを担当しております。今回、40 分ぐらい時間をいただきまして、先ほどタイトル申し上げた「若者が地域参加したくなるボランティア」ということでお話しさせていただきます。

◇青少年健全育成を推進する共通の困り事

普段の皆様は、地域の青少年の健全育成の功労者です。先ほどお話しを伺っただけでとても楽しくなりました。

江東区と足立区のそれぞれ特色ある地域で、色々な活動を企画した青少年の事業を伺いました。先ほどのデータを見せていただきますと、青少年の中でも少年が集まってきても、青年（＝若者）が集まらないということがあるのではないかと思います。

では、困っていることはどんなことでしょうか。私が現場で良くお聞きするのは、次のようなことです。例えば、色々なイベントとか地域活動を企画しても来て下さる人が少ない、協力者が少ない、自分たちばかりが活動をしている、いつも同じ人が参加しているなどです。普段から、一生懸命に地域の活動をされている方々は、共通の困り事があると思います。

運営側の方も、いつも同じ人が準備したり、考えたり…、青少年関係って言ってもメンバーが固定化し、メンバーの年齢がスライドして高齢化している、委員長や副委員長が変わらないなどということが、地縁組織ではよくあります。

また、内容についても、先ほどの事例内容はとても面白そうだったのですが、地域によっては、いつも同じ内容で、前例主義で、同じ内容の繰り返しがあるかもしれません。

さらに、2020 年以降のコロナは、私たちの地域活動の存続にとっても大きな影響を与えています。例えば、町内会長とか地域の方の了解が得られないと、地域の事業ができないジレンマ。地域を担う方の年齢が高くなり、引継ぎが難しく、状況によっては伝統的な活動が消滅してし

もう可能性もあります。もう3年も活動を中止すると、新たに活動を興すエネルギーは並大抵ではいきません。「どうしようかなって、もう思い切ってやめちゃおうかな」って迷われている方もいらっしゃるかもしれません。そういう難しい状況、そして地域の声を聴きながら、皆さんは地域を束ねていらっしゃるのだと思います。

◇学生と取り組む地域貢献

さて、つい最近、私が若い学生たちと共に実施した活動紹介を少しさせて下さい。

①多文化共生を目指す「ウィンターKIDS 運動会」

この写真は、一昨日実施した活動です。大学近隣の地区センターの体育館をお借りし、「多文化共生をすすめる会」の団体さんと協働して、大学・学校・地域（社会教育施設と地域の団体さん）が協力した「ウィンターキッズ運動会」を実施しました。子供を対象にした冬の運動会は、「クリスマスKIDS運動会」を、私が神奈川大学に着任した2016年から続けてきましたが、今年初めて名前を変えました。その理由は、多文化共生を目指した時に、「クリスマス」という言葉は使わないでほしいというオファーが地域からありました。例えば、国や宗教が異なれば、「クリスマス」がダメな外国ルーツの子がいることを教えて頂きました。私たちは、その対応について悩みましたが、学生同士が話し合い、急きょタイトルを変更にして進めました。この事業は、20歳に満たない学生たちが全て担い、企画と運営をしました。準備不足な部分もありましたが、終わった後は、子供も保護者も、学生たちも、喜びの顔に変わっていくプロセスを味わうことができました。

当日の様子なんですけれども、子供たちが52人で、外国ルーツの方々が15人っていうことで、学生ボランティアが、企画したのが9人なんですけれども、それ以外に応援のボランティアということとか、大人の付添い、保護者など、色んな団体さんなども一緒に来て、結構多くの方々が集まりました。

また、学生たちの準備が、若者たちの準備が全然足りなくて、当日、予算も取って、お菓子の準備など、プレゼントの準備などをしてたんですけれども、全然間に合わなかったの、その辺に座ってた保護者をかき集めて、当日ボランティアで「お菓子の袋詰め、裏方手伝ってください」ということをお願いしまして、こういう形で巻き込みのボランティアをお願いしたりなどしております。子供たちの体力は大変落ちています。大変落ちてるのか、こういうことをやったことがないのかっていうことと、両方あるかなと思うんですけれども、大縄を企画したんですけれども、プログラムに入れたんですけれども、全然飛ばませ

んでしたね。一番飛べて10回でしたので、このプログラムはちょっと失敗だったかなと思うんですけども、それ以外は結構楽しくできました。

②耕作放棄地のミカン収穫（ワークキャンプ）

他に、これ、先週行ったんですけども、小田原です。神奈川県にあるんですけども、小田原市、ここに農業の耕作放棄地っていうのがたくさんあります。その耕作放棄地になってしまったところをシニア団体とコラボして、農業委員の方々に色々なことを教えていただきながらミカンの収穫のお手伝いということで、農業の体験を初めてしたということ。また、山があって海があるエリアなんですけれども、お魚があるっていうことで、お魚を最近の若者は食べないっていうことがあるので、もう魚ブランドに向けた、このかます棒の方で、漁業の担当者と、その漁港の方々とコラボしまして、かます棒の体験ということで、色々とお話を伺うということをしました。

学生からしてみると、半分ボランティアで半分遊びみたいな、そういうところもあるんですけども、往復で大体交通費だけで2,000円かかります。また、色々なことで大体3,000円ぐらいのお金の準備があるんですけども、やっぱり初めはちょっと遠くに行くとお金の問題を非常に気にしますけれども、参加してみると、ああ、これはとても良かったっていうことになって、また行きたいという声に今なっているということで、体験、学ぶ、考えるという、こういった繰り返しをやっていきます。

③シブヤ大学と大学がコラボ講座企画

また、神奈川県内ばかりではなくて、東京都渋谷区のシブヤ大学は皆さんもご存じだと思うんですけども、そこと共同で企画しまして、学生企画ということで、これ、ちょっと講座が込み入っているんですけども、先週、キンボールスポーツ大会というのをやって、ケアコミュニティ、原宿のところが、廃校になった小学校を活用した場所なんですけれども、そこでキンボールのニュースポーツをさせていただくということと、あと、これも一昨日、専門学校、メイクアップの専門学校と大学生がコラボしてメイクアップ講座みたいなものをして、私は参加できなかったんですけども、終わった方々が満面の笑みで帰ったということで、講座が非常に良かったっていうことを言っておりました。

◇若者の活動イメージを膨らませる

こんなことで、結構、前置きが長くなりましたけれども、皆さん、若者の顔のイメージをちょっとつくってほしいと思い、最初に写真をお見せ致しました。

◇本日の学習目的

今日の内容は、一つ目は「若者の趣向や気持ちを理解する」、二つ目は「潜在的ボランティアの存在」に着目して、どのようなステップが必要なのか知ること。三つ目は、「若者を後押す戦略を考える」ことです。

先ほどの前提の話で、既に答えが出ていますが、これからどう戦略をつくっていけばいいのかお話しさせていただきます。

私自身、東京都の経験は、中学、高校、大学・院と、15年近く東京都にいたのではないかと思います。

◇若者と関わる時：若者のココロの構造

まず一つ目の話は、若者と関わる時に大切にしていることですね。若者がどういう気持ちなのか、若者のココロの構造を知った上で、関わるのが大事だと考えています。

でも、若者の気持ち、それが若者ではなくても、ほとんどの方々の気持ちは同じかなと思います。こういった地域活動の推進をされている方々、企画や運営などを積極的にされている方々は、いつも挑戦している状況にありますので、新しい挑戦やチャレンジは、当たり前だと思われています。正直、私自身もそうです。怖いもの知らずみたいな感じです。現実問題として、なかなか若者がどういう気持ちなのか、わからないところがあります。

ただ、多様な学生たちから話を聞いてみると、聞いたことがあるような言葉がいっぱい並んでいます。例えば、「面倒くさい」、「大変そう」、「お金が掛かるでしょう」、「つまんなそうじゃん」、「知っている人がいないから行きません」、「怖いです」というように、色々な言葉を並べたてて若者たちは「怖い」とか「面倒くさい」という言葉で片付けます。何かやりたいという気持ちがあっても、そこに、活動することに蓋をしてしまうっていう状況が現実的にはあります。

◇地域・貢献活動のイメージアップ

ゼミ生が行っている卒業論文の結果がユニークでした。神奈川大学の学生を対象とした調査をしました。神大生は普通の大学生の代表者です。「なぜ挑戦できないか？」という問いに対して、圧倒的に「勇気が出ないから」と回答しました。「勇気が出ない」や「怖い」ってどういふことでしょうか。おばけ屋敷に行くわけじゃないのに「怖い」といって片付けてしまうのです。「勇気が出ない」し「怖い」から、活動に一步踏み出し、行動したり、挑戦したりすることができない現実があるのです。

地域・貢献活動の場面では、スライドのように、「できる、やりたい」という声と、「できない、やりたくない」という声と、この2極化している状況が起こっています。

例えば、私は社会教育を専門としていますので、「できる人」や「やりたい人」だけを集めて、学校教育とは異なる「やりたがり」のハイリピーターを集める形になっています。

でも、「できない」や「やりたくない」という声には色々な思いがあります。「できるか」か「できないか」の2項対立の状況ではなくて、その真ん中で揺らぐ思いを持つ人が本当は多い筈なのです。

◇ボランティア統計からみる若者実態

この統計は、普段、皆さんが見慣れている社会生活基本調査のボランティア統計です。簡単に説明します。最新版が2022年に出されました。ボランティア行動者率は18.5%で、まさにコロナ禍に調査しましたので、2016年、コロナ前のボランティア行動者率に比べて大幅に行動者率が減少している状況にあります。

詳細をみると、例えば20~24歳は、2016年時点で、例えば女性、2016年の時点では20%から12.5%に激減し、ボランティア行動者が「5人に1人」から「10人に1人」になってしまいました。正にこれまで一生懸命に、青少年健全育成を行い、地域貢献を育てていた状況が、このコロナの3年間によって、若者の活動力を失わせてしまった状況が現実になってしまったのです。

2016年以前の学校と地域との連携についても、「開かれた学校」を目指して、子供・若者の地域活動は伸びていましたが、コロナによって大幅に活動者数が激減したと推測されます。コロナが収束した段階で、激増することは考えられにくく、これからの地域活動に予測がつかない状況があるかもしれません。

◇潜在的ボランティア希望者に着目

毎年出されている世論調査の結果を見てください。コロナ前に着目するため、2016年の統計をみると、次の傾向がありました。

世論調査の「社会意識調査」は1974年からずっと継続している調査です。そこに「社会貢献意識」調査があります。「役に立ちたいのか」という問いです。日本人の6割~7割が「役に立ちたい」と回答します。しかし、実際にボランティア活動等を行っている人は、コロナ前は26%、2022年調査では12%程度に落ち込みました。つまり、「役に立ちたい」という気持ちと、現実の行動とに大きなギャップがあるのです。これが、意識と行動のズレということです。

◇ボランティア活動層について

ボランティアは、一般的に、自分の労働、時間、能力を、家族以外の第三者の人に自主的・自発的に提供する人を指します。そうした活動を「ボランティア活動」と言います。

先ほど申し上げたように、「顕在的ボランティア」をする人たちは一部に過ぎません。また右側の「無関心層」は一定数います。

ど真ん中の「潜在的ボランティア」活動は、役に立ちたい気持ちはあるけれども、実際にはボランティア活動をしていない層ということで、大体4割～5割は存在するのではないかと予測しています。

このように、「ボランティア」といえば、私たちは「ボランティア」をやっている人だけに注目しますが、ここで重要なのは、「役に立ちたい」と思っている人たちはいっぱいいるけれど、実際には行動には移してない人がいるということ。それを「潜在的ボランティア」と名付けました。この層を知っていただくとありがたいなと思います。

◇「潜在的ボランティア」の構造化

「潜在的ボランティア」の構造を示してみると、こんな感じです。

活動の参画をする中心的なメンバーはほんの一部です。また、先ほどご紹介にあったような人たちは活動現場にいて、活動を推進している人たちが地域の真ん中にいます。

でも、実際は、色んな事情があって迷っている「潜在的ボランティア」が活動の外にいます。「この時間が合わなかった」とか、「予定が合わなかった」以外に、先ほど申し上げたように、「不安だから」「怖いから」「どうしようかな」「行こうと思ったんですけどやっぱりやめました」など、地域の周りには多様な声が渦巻いていることが分かります。

地域活動の支援者（行政サイド、地域団体さん）は、周りの「潜在的ボランティア」をいかに促すか、検討してみるといいのではないかと思います。

では、実際に「潜在的ボランティア」をどのように誘うか。「誘い込むのか」ということをこれまで研究してきました。その一端をご紹介させていただきます。

◇若者調査にみる「潜在的ボランティア」6割

このスライドは、2020年に国立青少年教育振興機構で実施した調査研究委員で出されたデータに基づき作成したイメージ図です。

右上は「潜在的ボランティア」になります。この「潜在的ボランティア」の中には、当日「参加者」（お客さん側）として参加した人たちと、大人側の一生懸命準備してきた「参画者」、企

画や運営に携わってきた「参画者」がいます。

本調査は大学生を対象を限定していますが、約 3,000 人調査です。「潜在的ボランティア」に注目すると、学生たちが「可能なら参加してみたい」層は約 60.3%もいます。

でも、「どうして参加しないの?」といえ、ば、「お金がかかり過ぎる」「時間が取られ過ぎる」「継続的にできない」という一般的に知られた課題があります。「ボランティアに参加したことがない」層は、「忙しい」（「授業が忙しい」、「アルバイトが忙しい」、「部活が忙しい」）や、「ボランティア活動よりもアルバイトなどお金もらった方がいい」や「情報がない」などの声があります。

では、「可能なら参加してみたい」人たちが、「どんな活動に参加してみたいのか?」という、調査結果があります。それは、「まちづくりの活動」「文化・芸術・学術に関係した活動」「自然や環境を守るための活動」「小学生を対象とした活動」（特定のニーズや課題を抱えた子供を対象とした活動）などに関心があるようです。

こういう結果を受けて、先ほどの小田原プロジェクトや、外国ルーツを持つ子供たちと一緒に運動会をやったりすることは、学生ニーズに合う活動でもあります。

◇支援者が「潜在的ボランティア」をどう誘うか

では、支援者側は、「潜在的ボランティア」をどうしたら誘えるのでしょうか。これまで、都内では、墨田区、足立区、江戸川区など、私が講師をやるごとにワークショップをやりながら、調査カードを集めたところ、624 点の意見を収集しました。

その結果、活動の条件設定として一番多く上がったのは、「情報発信」です。これ当たり前ですね。「情報がない」ということなので、「情報発信」が必要です。意外なのが「説明会、紹介、見学、経験者の話」を聞いて納得したいという声が結構多くありました。他に、「多様な活動内容の企画」で、「色々なことに挑戦してみたい」など、です。「手続きの手軽さやハードルの低さ」「短時間での活動・時間調整が出来る活動」「活動から得られる得があるもの」ですね。「心と体が得しちゃったっていう状況になるもの」とか「学校の授業の一環としてやっているもの」、あと、「紹介や誘い、口コミがあるもの」、「やりがい、生きがい、楽しさがあるもの」、「友達と一緒にグループでできるもの」、「交通費があまりかからないもの」、「交流があるもの」など、ちょっと聞いたことがあるような内容がかなり挙げられました。

◇若者はどんな情報発信を求めているのか?

授業の一環で、具体的に若者は「どんな情報発信を求めているのか?」「何を見ているのか?」についてワークショップを行いました。

若者が日常的に視聴しているのは、「ホームページ」、「インスタグラム」、「ツイッター」、「ユーチューブ」、「ティックトック」。

このうち、私が実施しているのは、このうち二つぐらいです。「フェイスブック」は年配がやるものであって、若者は見ないそうです。今、結構、生涯学習センター等では、フェイスブック発信を一生懸命やっていますが、若者は見てないそうです。

少し意外だったものは、学生たちが、どこでどのように情報を得たのかというと、情報提供の部分で言うと、「掲示板」、「回覧板」、「新聞・広告」は△です。ただ、一番上に書いた「掲示板」は欲しいようです。例えば、大学構内の「食堂」などの「掲示板」であれば、みんな黙食して暇だから掲示板を見るそうです。

近隣に大学がある場合、「大学食堂」を有効活用し、掲示させてもらえる、「大学の掲示板」に貼らせてもらえるようなチラシがあれば、見るそうです。一人で歩きながら、みんなきょろきょろして掲示を見ているということでした。

私の大学に限定されるかもしれませんが、「大学食堂の情報発信を充実させてほしい」、「1人でご飯を食べて暇な場合も多い」という話がありました。

また、同世代の活動を聴いてみたいことですね。「安心できる」という状況をつくった後に活動に参加したい、ということが結構あります。

私の場合は、大学の授業に、ボランティア講師として、地域の方々にバンバン来て頂き、10分程度事例紹介などお願いすることが多いです。

◇活動に参加した動機（2000人学生調査）

具体的な話では、「活動に参加した人たちの動機」を大切にしています。「どんな動機で参加したのか」ということで、約2,000人の学生調査があります。

例えば、「自分の成長につながった」、「様々な人と関わりたかった」、「楽しそうだから」、「誰かの役に立ちたかったから」、「活動分野の経験やスキルを得たかったから」ということです。キーワードとしては、「成長」、「交流」、「楽しい」、「役に立つ」、「スキルアップ」が動機になります。

この成長戦略をいかにつくるかが重要です。ただ、「活動をしてほしい」や「こういうことがありますから来てください」ということだけでなく、「今回こういうことをやろうと思ってい

て、もし来たらこういうことが、勉強になると思うのだけど来てみない？」ということです。

誘い方も、活動を通じて、具体的にどのような成長や交流があるのかアピールすることが大事ではないかと思っています。

◇参加してよかったこと（2020 人学生調査）

参加して良かったことは、「楽しかった」、「物の見方や考え方が広がった」、「相手に感謝された」、「達成感や満足感が得られた」「コミュニケーション能力が高まった」ということです。冒頭の担当局長の話にも似た結果が出ています。

ここで最も重要な点は、「参加して良かったかどうか」について、参加者本人に評価させることです。

「お疲れさま、今日は良かったよ」ということで一方的に終わるのではなく、「今日参加してみてどうだった？」と足止めして、ちゃんとリフレクション（振り返り）をすることがとても大事になります。

初めて参加した若者の声、2回目参加した若者の声、何回も参加している若者の声は、どんどん変わります。その声がどのように変容するか、観察することが大切です。

特に初めて参加した若者は、「放ったらかし」はダメです。みんなで手分けをして「声掛け」をしていくことが小さな努力が大事です。

例えば、活動者の隣に立って、「今日はどうだった？参加して、怖くなかった？」など、初めて参加した人たちの声をちゃんと聞いてみるのがとても大事です。

その時に、「感謝する」「感謝される」行為、をパフォーマンスすることが重要です。みんな「感謝されたい」と思っています。もちろん、若者も、地域の方々も、みんな「感謝されたい」のです。

だから、私は初めてボランティアに参加した学生に「声掛け」を積極的にします。「今日、初めて来てどうだった？緊張した？大変だった？」っていうふうに聞きます。別れ際には、「今日来てくれてありがとうね。すごい助かったよ」など、感謝の言葉を一人一人に言うことを大事にしています。

若者の参加者といっても、5人～10人程度しかいませんので、一人一人に「今日来てくれてありがとうね」って言うことは簡単なことです。20秒ぐらいで終わるこの一言なのです。

「大人から感謝された」という実感は、青少年である若者のココロに響きます。達成感とか満足感っていうことにつながってくるのです。感謝の言葉は、家族にはなかなか言えないもので

すが、敢えて口に出すことが大事です。

◇若者はどんなボランティアをやりたいか？

では、若者はどんなボランティアをやりたいのか、という話ですね。

ちょっとみんなの耳が痛いところですが…やりたくない活動は、「やらされているボランティア」頼まれただけのボランティアは嫌だということですね。あと、「事務系とか職員が手が回らない仕事の丸投げ」。例えば、実習に行った時もたまにある話なのですが、「その窓拭いといて」「その草むしりをしておいて！」みたいな。「なぜ草むしりをしなければならないのか」という説明がなかったのです。草むしりやごみ拾いは、とても大事ですが、なぜそれが必要なのか、丁寧な説明がとても大事です。

他に、「何のためにやっているか分からないボランティア」は、みんな嫌なようです。

今の若者は結構理屈っぽい、納得しないと駄目なところがあります。「今日は来てくれてありがとう。人が落としたごみを拾うのは嫌だよ。でもごみを拾うと何がどう変わるのだろうか？この通りをキレイにするために、どのくらい時間が掛かるのかな？」というように、少しゲーム性を取り入れて、何のために活動をするのか、納得しながら行うことが重要です。

他に、「ボランティア自身が自己決定できない」ということです。私自身はボランティアの推進者ではありますが、普段はなるべく口出しをしないように注意しています。

例えば、「ウィンターキッズ運動会」についても、学生が全然準備をしない、連絡をしない等であると、相手先との関係もあるので、学生に対して落胆することがあります。ただ、企画している学生はまだ19歳とか20歳の未成熟な青年です。来月、成人式を迎える子供のような大人（若者）なのです。だから、初めて大人にメールを打つ時など想像以上に時間を要するようです。先日、学生が言いましたが、一通のメールに、「これで良いのか…15分間画面を眺めて確認し、それでもこれで本当に合っているのか不安になり、なかなか終わらない」と言っていました。若者にとって、初めてはそういう小さな試みを応援し、大人が励ましてあげるところから行うことなのです。

なるべく若者たち自身が自己決定し、うまくいってもいなくても、「失敗できる環境」、「責めない環境」を大人が設定するということです。若者自身が「自己決定した」プロセスこそ、ボランティア活動の場に必要なのです。

一方、やってみたいボランティアとして、「好きなことをやらせてくれるボランティア」です。だから、自由性を持たせ、若者が好きな枠を与えることが大切です。「この部分は、任せ

るからよろしくね」という言い方です。また、「人の喜ぶ顔が見えるボランティア」です。ひたすら書類づくりや事務作業をするのはボランティア活動に向かないのです。例えば、実習先でもひたすら封詰めをする活動がありました。封詰めプラス交流があるように、活動の楽しさを知る組合せの工夫です。このように、「人の喜ぶ顔が見える」仕掛けづくりが必要です。また、共に創る活動ですね。例えば、商店街活性化プロジェクトを実施していた時に、商店街から「あれをやってほしい」「これをやってほしい」とありました。ただ、やらせてる感じがあると、だんだん若者たちのやる気も失われていきます。だから一緒に、「じゃあ、一緒にお店に行って、ここの部分一緒に考えて頂けませんか？」というように「共に創る」と、関係性が良好になります。さらに、「大人が、やったことを評価してくれる」ということです。

◇「潜在的ボランティア」を促す構造図

先のポストイット 600 近くを収集・分類して、「潜在的ボランティア」を活動に誘う構造図を作成しました。

全体の4—5割にあたる「潜在的ボランティア」を中心に据え置いてみると、年代別にみた傾向が露わになります。

大人の場合は、「地域」の中の伝統や文化や自然や風土に影響され、やらざるを得ない活動が多くあります。

一方、若者の場合は「人間」に関わるものを強く求めます。例えば、「楽しさ、やりがい、達成感、自己成長」がある仕掛けづくりですね。あと、「感謝される」「喜ばれる」そこに「笑顔がある」ことです。先の事例にあった「共笑」に近いでしょうか。また、「交流」や「対話」によって「つながり」や「ふれあい」があることです。さらに、「友達」や「グループ」などの関係性です。こういう場合、「友達」と「グループ」を丸ごと巻き込んでしまえばよいのです。

また、活動の拠点として、「居場所」(スペース)が重要です。そこで、「必要とされる」「承認される」実感を持つことで、次の活動やチャンスにつながります。

「社会」の観点からみると、それは行政側から公共サービスをどうすべきかのヒントになります。「社会」の仕掛けづくりとして、「紹介・誘い・ロコミ」があること、「情報交換・居場所」があること、「説明会、紹介、見学」があることなどが挙げられます。こういう地域の仕掛けが丁寧に行われることによって、活動者を誘うことができます。その際に、決められた活動よりも、「多様な活動メニュー」の準備があった方がいいわけです。

その他、特に高齢者層は、「短時間・時間調整が可能」で、「近場でアクセスしやすい」こと

が不可欠です。交通費が掛からないところに行きます。「かながわユースフォーラム」では、町内会活動であるプログラムを実施するから来てくださいと「潜在的ボランティア」層の学生に声掛けしたところ 30 人が集まりました。活動は、時間限定の方が良いのです。この「2 時間だけ」とか「3 時間だけ」とか、体験ボランティア活動は特に人が集まります。

また、「手続きの手軽さ」「ハードルの低さ」「経済的な負担が少ない」なども大事です。

例えば、学校から紹介された場合、先生が行けなくても、この活動だった安心して行ける、と保護者は判断するのではないかと思います。

◇成長実感を見える化する「なりたい私」

成長実感をつくるためにはどうしたらよいでしょうか。

ボランティア活動を始める前に、何か申込用紙などを書いてもらうことがあると思います。その際、単に申込用紙の名前や連絡先を書くだけではなく、「皆さんはどんな私になりたいですか」という問いに拘ります。

また、活動が終わった後に、「どう変わったの？」というように、成長実感をリフレクション（振り返り）する問いをセットしておきます。例えば、「なりたい私」を書かせるなどもその一つです。例えば「好奇心を伸ばしたい」「人をつなげてみたい」「挑戦したい」「人と関わってみたい」など、大人しい若者から積極的な若者まで様々な若者がいます。異なるキャラクターでも、「自分たちがどう成長したのか」ということを自分の言葉で語らせることを大事にしてきました。

◇地域活動を将来のキャリアに生かす

①自己開示を避けてきた女子学生の変化

実際に、この学生たちは来年、もう就職している子たちです。真ん中にいる学生は来年から鉄道会社に勤めます。もちろん本人に承諾を得て、今日ご紹介しているのですが…この女子学生は、九州から出てきました。自己開示が苦手で、自分に自信が持てなくていつも泣いていました。特に、コロナの時はもう大泣き状態で、「自分の過去を考える時間が増えちゃった」、「コロナで考える時間が増えちゃったから余計つらくなった」と嘆いていました。でも色んな地域貢献活動を一緒にすることで、地域の方々から大事にされ、自分を認められるようになったようです。徐々に自己内対話を増やし、将来の夢を持ち、頑張ろうという気持ちにかわったようです。その根底には、自分も、相手からも認められるプロセスにありました。

②人を避けてきた男子学生の変化

もう1人男子学生ですが、彼は本当に細長い今どきの若者です。しかし、文面にある通り、「人をずっと避けて生きてきました」と書いています。しかし、色々な地域貢献活動を積み重ねていくうちに、「自分が180度変わった」「やっと人間になれました」「人に向き合ったりとか、人の喜怒哀楽や幸せに触れられることが幸せになってき」ということです。

来年は人材コーディネーターとして働く予定です。地域貢献活動を介して、自分の成長と将来のキャリアにつながっていくこと、若者の活動をサポートしていく際に、強調していくことが大事なのではないかと思っています。

◇社会参画力を高める

活動の参加や参画のプロセスが重要です。

はじめは、「知る機会」（情報を届けるとか、SNSで発信する）です。次に、「体験の機会」「体験ボランティア」です。いつでもやめることができる体験ボランティアであれば、みんな安心して参加できます。「学ぶ機会」は手軽な交流型プログラムが向いています。例えば、1回3時間、1回5時間というように、「1回だけ」やってみるプログラムは無理のないことです。この活動には、多くの参加者を得ることができます。

さらに「プロジェクトベース」で行うことです。終わりのある活動にしてあげることです。地域の活動は、持続性が不可欠です。地域はずっとつながってるため、若者にもできれば継続してほしいという本音と願いを持っています。ただ、若者の特色としてあるのは「好奇心旺盛」で「飽きやすい」ということです。「色々なことに手を出したい」ということです。

ある時は子供に関心を持ち、ある時は高齢者に関心を持ち、ある時は障害者に関心を持ち、あれもこれもとなるケースが良くあります。あちこちに手を出して混乱してしまう若者もよくみかけます。若者の特色を鑑みると、「プロジェクトベース」にすれば終わりもある活動となります。支援する側は、「1回ここでスタートします」「ここで1回終わってやめていいよ」と言ってあげると、安心して参加してきます。また、学校教育では「探究型学習」が始まりますので、そことの組み合わせも戦略の一つかもしれません。

また1回目プロジェクトに参加した人は、次は「支える側・サポーター」に回ってもらい、もう1段上の段階に上らせてあげることが大事だと思います。

先ほどの「持続的、継続的な活動」は、地域側には当然強い期待があります。ただ、なかなか何回も何回もやって来る学生は多いとは言えません。たとえ繰り返し来ても、その都度、成

長実感と自信につなげていく活動が大切だと思います。

◇地域貢献活動をSDGsポスターへ見える化

このポスターにあるような活動「かながわユースフォーラム」にて多様な活動を実施しています。「町内会活動」や「商店街活性化」など、色んな活動を学生たちが仕掛けづくりを応援しています。こういったプロセスを経て、学生たちは社会人と未来へ羽ばたきます。

◇大人は若者にどう寄り添うか？

大人はどう若者に寄り添うのかについてまとめを行います。何かやりたがっている若者は沢山います。先ほど述べた通り、約6割の人たちは「可能なら参加したい」と言っているわけです。「可能なら参加したい若者たち」に、大人は何をどうすればよいか、単純です。

「声を掛ける」ということです。「待つ」ということです。「後押ししてあげる」ということ、「背中を押してあげる」ということです。

「その背中を押してあげる」と同時に一緒に隣に立って楽しんだりとか、生き方を含めて一緒に「楽しいよね」と伝えることが大事です。この繰り返しによって、「自主性」とか「成長実感」があるため、「挑戦」につながります。

◇まとめ：若者が参加したくなるボランティア

最後のまとめです。「若者が参加したくなるボランティア」は、一つ目は、若者の気持ちを理解することですね。「やってみる？」という「声掛け」が大切です。共に伴走することです。

二つ目は、若者が「自信」を持ち始める段階を見届け、背中を押してあげることです。自己肯定感とか自己有用感のプロセスを見届けてあげることがとても大事です。

三つ目が、若者の達成感や満足感が満たされて、次もやろうと動き出すことです。「次もやりたい」というようになったら、既に成功しています。彼らが「次もやりたい」と思わせるように周りの環境を整備していくことです。

これが非常に単純なのですが、今回の講演の若者が地域に参加したくなるボランティアということになります。

以上、私の話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○地域活動推進担当課長 齊藤先生、どうもありがとうございました。

先生のご講演を聞いて、ご質問のある方はいらっしゃいますでしょうか。ご質問のある方は挙手ボタンを押してください。こちらからの指名がありましたらミュートを解除して、マイクをオンにしてください、所属とお名前をおっしゃった上でご質問ください。ご質問のある方、

いらっしゃいますでしょうか。

そういたしましたら、では、いらっしゃらないようでしたら、私から、二つほどご質問させていただきます。

まず、一つが、先ほど先生のスライドの中に、若者が活動に参加した動機であったり、参加して良かったことといったところのご紹介もありました。そこで一つ目の質問なんですけれども、先生が学生さんたちと関わっている中で、学生たちの意識が変わったなど実感されたような印象的な事例がありましたらお聞かせいただきたいというのが一つ。

それから、今日の先生のご講演の中を通してキーワードとして、潜在的ボランティアというのがあると思います。潜在的ボランティアと地域団体や地域活動がつながることというのが、その地域の人材確保であったり、活性化といった課題解決にとっても寄与するのかなというふうに感じました。そこで二つ目の質問というのが、そういった潜在的ボランティアの方々を活動にいざなう工夫の例ですね、そういったものをご存じでしたら教えていただければと思います。

○齊藤教授 はい、ありがとうございます。

まず一つ目は、「活動の動機」や「良かった」場面の具体例についてです。一番成長実感が高かったのは、自分たちが課題解決のプロジェクトを達成した時には一番成長実感が高かったように思います。自分たちで企画・運営をして、ゼロベースで色んな団体とコラボさせて頂いた時は良かったです。

大人の方々には、色々とお面倒をお掛けし、色々後押しとか大変だったと思います。そこで若者の話を聞いて頂いたり、若者たちが自分たちでやりたいと思ったことを実際にやってみる試みを行いました。例えば、2022年の6月でしたら、商店街にポニーを連れてくるプロジェクトです。商店街は、空き店舗が増えていて、「なんとか元気にしたい」ということで、動物を連れてきて、ポニープロジェクトを実施しました。

その時に、自分たちが企画・運営して、「町内会」の方々や「商店街」の方々などの大人を説得する場面で、学生たちは極度の緊張をしています。そういうプロジェクトを1クールやっていくことで活動レベルが高まることがあります。たった3カ月程度ですが、学生は急成長します。

二つ目の「潜在的ボランティア」の方々を活動に誘う工夫例についてです。この例としては、「人が人を連れてくる」鉄則に基づき、一人の学生が2人を連れてくる仕組みです。彼らが手をつなぎ、2人ずつ連れてくれば、たとえ10人しか集まらなくても、それぞれが2人名つれ

てくるため、30～40人は参加してくるのです。「友達が友達を呼ぶ」誘い方が良いのではないかと思います。

以上です。

○地域活動推進担当課長 先生、ありがとうございました。

その他、ご質問のある方はいらっしゃいますでしょうか。ありましたら挙手ボタンで挙手をいただければと思います。

それでは、これで質問を終了させていただきます。

本日は、「若者が地域参加したくなるボランティア：若者のココロの構造を知る」をテーマに、若者の地域参画を促すヒントや今後に向けたメッセージをいただきました。皆さまのこれからの地域活動のご参考にしていただければ幸いです。齊藤先生、貴重なお話をありがとうございました。

続きまして、意見交換に移ります。本日の議題に関連することや、皆さまが日頃取り組まれていること、感じていることなど含めまして、ご意見等ございましたらお願いいたします。こちらも挙手ボタンでお願いいたします。

それでは、東京商工会議所様、よろしくをお願いいたします。

○東京商工会議所総務統括部総務課長

東京商工会議所総務統括部総務課長の山本です。ボランティア活動を青少年に呼び掛ける際に、東商で工夫していることというのを少しご紹介できればと思っております。

以前に産学連携を担当するセクションにいた際に、参画している大学の中で文系の大学には、中小企業から産学連携をしたいという申し込みがありませんでした。そのため、東商自身が発注者となって、文系大学と産学連携してプロジェクトができないかと取り組んだ事例をご紹介いたします。

東商ではオリンピックを機に、東京の中小企業の魅力を世界に発信するプロジェクトを企画しており産学連携で大学生の方に授業や有志のボランティアという形で、産業能率大学、東洋美術大学、文化学園大学、武蔵大学、この四つで、延べ100名ぐらいの学生に参加いただき、各校にて魅力を発信する映像を作成いただきました。

東京商工会議所で展開していた勇気ある経営大賞の受賞企業にインタビューしそこで得られた情報を基にシナリオや演出を考えていくという流れでした。最初に事務局から中小企業が果たしている役割や魅力をプレゼンテーションして、その中から学生が行きたい会社を選んで

インタビューして、そこで体感したこと、実感した中小企業の良さっていうのをムービーにまとめていきました。

今、振り返って考えると、先ほど、先生おっしゃっていた学生の成長実感はどう盛り込んでいくかが結構悩みでした。まず、まず学生と向かい合う事務局の担当者が本気になるということのを大事にしていきました。事務局としては魂を揺さぶる出会いを学生の皆さんにご紹介するので、学生の皆さんにもぜひ本気になってほしいということを明確に伝えました。

加えて、求めるクオリティーは下げないことにしました。体感、実感したことがちゃんとアウトプットになっているか、学生の中でより良いものを製作するための議論を避けていないか、そして、商工会議所に気を遣い過ぎていないかということに留意しました。学生の方にはエッジが効いた作品を作してほしいと言いつけました。

今年の令和4年5月の経済産業省のレポートで、未来人材ビジョンが公表されました。その中で、日本の従業員のエンゲージメント、会社の理念に共感し仕事を通じて貢献したい、やりがいを持っているというのが日本の従業員が一番低いという結果を読みました。今の社会人世代について、エンゲージメントが低いのであれば、社会人の背中を見る若い世代も、一步、足を踏みとどまってしまうのではないかと思います。レポートを読んで日本のエンゲージメントが低いということに実体験としても感じていました。その観点から先ほどご紹介したプロジェクトを振り返って担当者が本気になって、やらされ感ではなくて、自分の仕事として参加する学生が共感を持ってストーリーを考えていけるようにというのを工夫したことは、進め方としては正しかったのであろうと感じました。

説明は以上でございます。

○地域活動推進担当課長 はい、ありがとうございます。ただ今、東京商工会議所様より産学連携で人々を呼び込み巻き込んでいくといった工夫のコメントを共有いただきました。

その他、事前に委員の皆さま、アンケートでご回答いただいた意見を幾つかご紹介させていただきたいと思います。

「ボランティア活動を呼び掛ける際は、その意義や活動内容を分かりやすく伝えることが大切である。」、「活動に参加することで得られるメリットを明確に伝えた方がよいのではないか。」、「活動を呼び掛ける手段として、SNSやホームページ、Eメールなどを積極的に活用していきたい。」といったコメントも頂いております。皆さま、ご意見ありがとうございました。

それでは、こちらでちょうどお時間となりましたので、令和4年度、地域における青少年健

全育成推進会議を閉会とさせていただきます。

皆さま方のご意見を参考にさせていただきながら、私どもも地域における青少年施策にしっかりと取り組んでまいります。今後とも引き続きご理解とご協力のほど、よろしくお願いいたします。

なお、大変お手数ですが、最後にアンケートへのご協力をお願いいたします。

本日は、ご多用のところ誠にありがとうございました。